入浴介護を推進し、在宅福祉で家庭と地域に笑顔を!

入灣福祉新聞



第56回全国入浴福祉研修会 ~ 開催報告~

デベレ老人福祉研究所が主催する第56全国入浴福祉研修会を2月21日(金)東京都中央区の紙パルプ会館にて開催しました。



萬田緑平先生による基調講演

基調講演「最期まで日ー杯牛きる」

緩和ケア 萬田診療所院長 萬田 緑平 氏

基調講演では、萬田診療所院長 萬田緑平先生にご登壇いただきました 萬田先生は群馬大学医学部外科医として、何年も患者と向き合ったのち、 思うところがあり緩和ケアに移られました。講演では、終末期を迎えられた 患者さんやご家族の方々が、「ご自宅で目一杯生きる姿」を映像を交えな がらお話しいただきました。「訪問入浴のスタッフは、いつもすごく感謝され ていてうらやましい」と冗談を交えながらも、訪問入浴介護のあり方について、改めて深く考えることができる講演でした。

萬田先生のお話を通じて、住み慣れた地域や自宅で最期を迎えたいと願う方々に、訪問入浴介護が今後「担う役割」を共に考えることができた大変 貴重なご講演となりました。

【萬田 緑平 先生の講演に寄せられた受講者の方々の声】

- ・死をどのように考えるか。わかっている様で「わかっていない」・「説明できないこと」が理解できました。
- ・訪問入浴サービスの「やりがい」を再確認できました。
- ・終末期の患者様の人生を理解出来た事と、感謝する事の大切さを学びました。
- ・本人の意思を尊重するという介護の最も重要な部分を再認識出来ました。
- ・「一回の入浴」が大きな活力をもたらすという事を強く感じました。 1回1回のサービスを、さらに大切に取り組みたいと思います。



おすすめの1冊 萬田先生の著書 穏やかな死に 医療はいらない (朝日新書)



地域包括ケア 「**県民の誰もが住み慣れた地域で、安心して暮らし続けることのできる高知県**」 実践事例 ~医療費高水準の高知県の課題と今後の取組~

高知県 地域福祉部 高齢者福祉課 主査 林 英典 氏

「地域包括ケア実践事例」として、高知県地域福祉部高齢者福祉課の林 英典主査にご登壇いただきました。高知県では、他県より十年先んじて人口減少が進んでいます。人口減少が続く中で、高齢者や女性、若者が活躍する「輝く田舎」を目指す高知県の取組や在宅ケアへの展望についてご説明いただきました。同じ県内の自治体においても、人口や地域資源は大きく異なることからも、個別レベル・日常生活圏域レベルから老人保健福祉圏域(二次医療圏)の中での異なりについてや、地域連携のあり方などの取り組みについてご説明され、「住み慣れた地域で暮らし続けるための必要サービスとして、訪問入浴介護事業者が積極的に関わっていただくことで、地域を支えてほしい」と期待の声をいただきました。



林 英典 氏

同日開催 「訪問入浴介護のICT活用や経営の安定性や災害時等の支援に関する ^{令和元年度老人保健健康増進等事} 調査研究事業」報告会

同日開催として、デベロ老人福祉研究所が実施いたしました「訪問入浴介護のICT活用や経営の安定性 や災害時等の支援に関する調査研究事業」の報告会を行いました。

ICTの活用による生産性の向上やアンケートによる状況調査の他に、災害時における入浴支援のあり方では、移動入浴車を地域資源の一つと捉え、防災や災害支援計画の一助となるように多角的に調査研究を実施しました。

報告会では本事業の委員でもある東京都市大学の早坂信哉教授が事業総括としてご登壇。安全や安心といった質を重視する中で、社会資源としての役割を理解して、地域を支える事業者としての責務についての見解を述べられました。



早坂信哉 教授

本事業の報告書はデベロホームページでご覧いただけます。ホームページ: http://www.develo-group.co.jp

No.7

2020年春号 令和2年 4月15日(水)発行 発行人:梅澤 秀樹 編集発行所 : デベロ老人福祉研究所

日本入浴福祉研究会事務局

株式会社デベロ

〒310-0841 茨城県水戸市酒門町1744-2 TEL 029-247-2211(代) FAX 029-247-2214

訪問入浴介護の未来!! ~ICTの進化でサービスも進化~

ICT(情報通信技術)とは、PCだけでなくスマートフォンやタブレットなど、さまざまな形状のコンピュータを使った情報処理や通信技術の総称です。ITは「情報技術」ですが、ICTはITにコミュニケーションを含めた「Information and Communication Technology」となり、単なる情報処理にとどまらず、ネットワーク通信を利用した情報や知識の共有を重要視しています。訪問入浴介護でもスマートフォンやタブレットを活用されている事業所が増えています。ご利用者様の身体状況等の把握や報告が重要な訪問入浴介護においては、その有効性が多岐にわたりますので、その一例をご紹介します。

事務作業の軽減、ストレス軽減

データが蓄積されるので書類の持ち運びが減る。索引・検索が簡単。訪問先でスマートフォンから介護記録を 入力したり、タブレットで次の訪問先の情報を得たりすることが考えられます。

根拠に沿った介護の実現

ICT機器で分析・フィードバックが可能に。共有情報や過去の分析情報を即時に知ることができるので、スタッフの経験値や勘に頼るだけのサービスからの脱却も可能です。

コミュニケーションの活性化

スタッフ間、多職種間との連携がよりスムーズになることで、「連絡が取れない」「報告が漏れた」などのトラブルが減少します。

生産性の向上

上記の事柄に加え、稼働状況やコスト管理を図ったりすることで運営全体の生産性を向上することが可能です。 業務負担やストレスの軽減は離職率の低下にもつながります。また、これまで事務作業にあてていた時間をケ アの時間にあてることで、ケアの質の向上も期待できます。その結果、スタッフのやりがいや介護職という仕事 自体の魅力がさらに深まります。

良いことづくめのICT化ではありますが、導入コストの問題や、個人情報を扱う場合は情報漏えいにも気をつけなければなりません。また、ICT機器を扱うスタッフへの教育も不可欠です。パソコンなどのデバイスに慣れないスタッフにとっては、慣れるまでは今まで以上の手間やストレスになる場合もあります。それでも便利で有効性が高いことがご理解頂けたなら、ICT化は着実に進むことでしょう。

古代、入浴は「儀式」として行われていました。水は全てを清めるもの、悪しきものを祓うものと信じられ、特に温かい水(温泉)は、「火」と「水」が融合した神霊からの授かりものとして考えられてきました。

6世紀中ごろ仏教が伝来、「沐浴の功徳を説き、汚れを洗うことは仏に仕える者の大切な仕事」として広まりました。 現存する寺院の湯屋として有名なものに、奈良・東大寺の大湯屋(重要文化材)があります。大湯屋には鉄製の浴槽が残されており、直径2mほどの「鉄湯船」は、真言宗の僧である重源によって造られたそうです。

重源は、布教活動の一環として施 浴を積極的に行い、入浴文化を広 めました。

湯につかった時に「**あー極楽**」と 思わず言ってしまうのは、寺での入 浴の名残と言われています。



現存する日本最古の浴槽 「鉄湯船(東大寺) 1282 年製造」

他にも「代わりばんこ」という言葉は、風呂を沸かす際に交代しながら鞴(ふいご)で風を送ったことに由来しており、作業にあたる人を「番子」と呼んだことから来ているそうです。

訪問入浴介護のお申込み・お問合わせは

本紙は、デベログループHP→「お風呂info」(http://o-fu-ro.info/)にて閲覧可能です。 プリントアウトして訪問入浴介護の普及啓発にご活用ください。